
 学 会 記 事

第53回新潟消化器病研究会

日 時 平成3年2月16日(土)
午後2時より
会 場 新潟厚生年金会館

一 般 演 題

1) 早期胃癌と胃非上皮性腫瘍が併存した2例

船越 和博・吉田 俊明 (信楽園病院)
村山 久夫 (消化器内科)
清水 武昭・土屋 嘉昭 (同 外科)

症例1は65歳、男性。胃角部前壁のIIa型早期癌の疑いにて、胃全摘術を施行。切除標本では胃角部前壁に31×22mmのIIa型早期癌を認め、組織型はtub1、深達度はmであった。また体下部小弯側の漿膜側に14×14×8mmの胃粘膜下腫瘍を認め、平滑筋肉腫であった。

症例2は65歳、女性。胃体上部小弯側のI型早期癌の疑いにて、胃全摘術を施行。切除標本では体上部小弯前壁側に15×16×8mmのI型早期癌を認め、組織型はtub1、深達度はsmであった。また前壁側に隣接して10×10mmの胃粘膜下腫瘍を認め、平滑筋腫であった。

早期胃癌に共存した胃平滑筋肉腫および胃平滑筋腫の2症例を経験し、早期胃癌と胃非上皮性腫瘍の併存は比較的希と思われ、若干の文献的考察を加え報告した。

2) 1cm以下早期胃癌のX線学的検討

小林 晋一・清水 克英
新妻 伸二・小田野幾雄
西原真美子・佐藤 玲子
佐藤 洋子・古泉 直也
近藤まり子・関 裕史 (県立がんセンター)
三浦 恵子 (新潟病院放射線科)
梨本 篤 (同 外科)
角田 弘 (同 病理)

1cm以下早期胃癌56例について、病変の高さと深さを計測しX線像の現れ方との関係をしらべ、X線診断の限界を把握し、X線検査の対応を検討した。

隆起型18例、陥凹型38例。隆起型の平均の高さは0.9mm、陥凹型の深さは0.5mmであった。隆起型は0.7mm以上、陥凹型は1.0mm以上ですべて示現された。隆起型の示現には大きさと高さが、陥凹型は大きさより

も深さの因子が重要であった。

Retrospectiveの病変示現率は68%、その診断精度は68%であった。部位別の示現率はM後壁、A前壁、後壁、特にA前壁が低く、診断精度は前壁が劣った。陥凹型はヒダ集中+例100%、ヒダ集中-例44%の示現であった。

X線検査の対応は、前壁の検査密度を高めること、Baを適度に溜める薄層法を重視すること、部位別にこまやかに検査すること、読影は細心に行うことが重要と考えられた。

3) 陥凹型早期胃癌に対する術前H₂ブロッカー投与例の検討

何 汝朝・小林 正明
藤田 一隆・月岡 恵 (新潟市民病院)
佐藤 明・市井吉三郎 (消化器科)
藍沢 修・丸田 有吉 (同 第一外科)
渋谷 宏行 (同 病理)
味岡 洋一 (新潟大学第一病理)

H₂ブロッカーの強い抗潰瘍作用が、胃悪性病変に及ぼす影響を知るため、確診の得た陥凹型早期癌23症例27病変に手術待機中本剤を投与し、投与前後における自覚症状、内視鏡診断及び深達度診断の推移について検討した。結果：腹部症状を伴う17例は本剤投与1週以内全例に症状は消失した。内視鏡診断では投与前IIc+IIIと診断された10例中、投与後IIc5例、S₁2例と肉眼的診断の違いが生じた。深達度では投与前sm浸潤と診断した例に投与後ではmと浅く診断される傾向が見られた。以上のことからH₂ブロッカーはUIを伴う癌病変に対し短期間で見せかけ上の癒痕化を来しうる。内視鏡的深達度の読みが困難となる。悪性サイクルの早期出現となりうる。癌に伴う腹部症状を隠蔽することがある。

4) 転移性胃癌の1例

松田 達郎・坂井洋一郎
山川 良一 (下越病院内科)
五十嵐 修・会田 博 (同 外科)
樋口 正身 (同 病理)
羽賀 正人 (坂井輪診療所)

4年前、原発胃癌にて噴門部胃切除を受け、さらに同年乳癌にて右Auchincloss法の手術歴のある65歳の女性の残胃にBorrmann III型の病変を認め、原発胃癌の再発の術前診断で胃全摘術を施行した。しかし術後の病理組織学的検索により乳癌の胃転移であったことが判明した。

転移性胃癌においては、粘膜下腫瘍の形態で発生し、のちに潰瘍を形成してBorrmann II型あるいはIII型の

形態をとることが多いとされ、本症例のように周囲に粘膜下腫瘍の要素が強い病変では転移性胃癌も鑑別すべき疾患の一つに上げる必要があると反省させられた。

5) 内視鏡的制癌剤油脂 Emulsion 局注療法が極めて有効であった胃進行癌の1例

出塚 次郎・阿部 二郎
荒川 謙二 (木戸病院内科)
魚谷 英之・吉田真佐人
阿部 斐一 (木戸病院外科)
味噌 洋一 (新潟大学第一病理)

時に重篤な副作用を引き起こす抗癌剤の全身投与に対して、腫瘍の転移巣や再発巣に選択的に高濃度の制癌剤を配分する Drug Delivery System (DDS) の手法が、近年胃癌のリンパ節転移例に対しても試みられている。今回私たちは、直接の抗腫瘍効果及びリンパ節転移に対する治療を目的として、胃のリンパ管造影剤であるリピオドールと、抗癌剤として全身投与においても単独にて効果の期待できるシスプラチンにより、シスプラチン-リピオドールエマルジョン (CLE) を作成、Borrmann 2型胃進行癌の患者において内視鏡下に主として腫瘍周堤に局注し、有効と考えられた1例を経験し、組織学的に検討を加え報告し、これを含めた自験例15例中7例においてその有効性が認められ、リンパ節転移の予防効果もあると考えられた。また CLE の追跡により胃リンパ流に関して検討し、胃癌取扱い規約に準じて若干の考察を加えて報告した。

6) AGML (急性胃粘膜病変) と十二指腸潰瘍を伴い、十二指腸アニサキス症が疑われた1例

佐々木 亮・斉藤 徹 (国保水原郷病院)
若杉 裕・寺田 一郎 (内科)

症例は22歳男性。主訴は心窩部痛。シメサバ摂取の翌日より心窩部痛を来し、その2日後の内視鏡検査にて急性胃粘膜病変 (AGML) と A1 ステージ十二指腸潰瘍が認められた。この時点では球部より遠位側の観察は行わなかった。H2 blocker 等による治療を行った。さらにその4日後の内視鏡検査では、AGML は消失し、十二指腸潰瘍は A2 ステージになっていた。十二指腸 2nd portion に数条の縦列する発赤が認められた。これらの発赤部は Kerckring 襞に一致して存在し同部は腫大していた。組織学的には、発赤部では絨毛構造の消失と腺管上皮の幼弱化があり、非発赤部では軽度の間質浮腫以外はほぼ正常であった。さらに8日後の内視鏡検査では

上記の所見は消失しており、組織学的にも正常であった。虫体は同定されなかったが、病歴、内視鏡所見、組織像よりアニサキスによる十二指腸炎と考えられた。

7) Double Pyrolus の1例

坂内 均・秋山 修宏
柳沢 善計・塚田 芳久
成澤林太郎・上村 朝輝
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例は53才女性。40才時に慢性関節リウマチと診断され、以後非ステロイド性消炎鎮痛剤と副腎皮質ステロイドの投与を受けている。平成2年12月、空腹時に増強する心窩部痛の精査のため、上部消化管内視鏡を施行。正常の幽門輪の大弯側周囲に潰瘍痕を持つ2次口を確認した。胃・十二指腸造影にて、2次口と十二指腸とは交通しており、double pyrolus である事が確認された。長期にわたるステロイド及び非ステロイド性消炎鎮痛剤の投与の既往があり、2次口の周囲に潰瘍痕を有する事より、胃あるいは十二指腸潰瘍の穿孔により形成された後天性の double pyrolus であると考えられた。

8) 胃癌術後に発症した気腫性胆道炎の1例

土屋 嘉昭・清水 武昭 (信楽園病院外科)

Pneumobilia を伴う胃癌術後急性胆嚢・胆管炎の一例を報告した。症例は73歳男性。膵脾合併胃全摘術後第22病日に腹痛発熱にて発症し、US・腹部レ線にて胆嚢と胆管内両者に気腫が描出され本症と診断した。経皮経肝胆嚢ドレナージ術を施行。胆汁培養にて Clostridium が同定され、胃癌の肝十二指腸靱帯のリンパ節郭清により胆道の運動障害・胆汁鬱滞・細菌感染により発症したものと考えられた。通常の急性胆嚢炎は細菌以外の原因で発症し細菌感染は二次的であるといわれているが、本症例は胆汁鬱滞・細菌感染が原因と考えられた。また本症は通常の急性胆嚢炎より死亡率が高いといわれているが、経皮経肝胆嚢ドレナージにて治療し、他の胆道疾患がみられなかったため胆嚢摘出術は施行せず治療した。

9) 手術後16年生存した肝細胞癌の1例

望月 剛・小林 匡
成澤林太郎・八木 一芳
野本 実・市田 隆文
青柳 豊・上村 朝輝
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例は59才、女性。1969年にB型慢性活動性肝炎の診断を受けた。外来通院中1974年及び1984年にAFP